

入中1年人権だより

徳島市 八万中学校
1年生 第19号
2020年12月 8日
編集・文 吉成正士

第2回学年全体人権学習から:11月12日第3弾

寒くなってきました。でも、朝一番に教室に入ると、あたたかい空気に包まれてホッとします。登校してきたみなさんを、「寒かっただろう」と気遣い、どなたかが暖房のスイッチを入れてくれているからです。空気よりも、その人の気持ちのあたたかさに、胸の芯があたたかくなります。

さて、前号の続きをあと少しだけ紹介します。

私は少し前にあった、「人権を語り合う中学生交流会」に参加してきました。あの場ではいろんな中学校の1から3年生が集まって、いろんなことを話し合いました。そこが一番、人権について自分が思うことを発信できる場所だと思ったので、今回学んだことを心に残して、また次も参加して、このようなことを他校の人たちにも伝えていきたいと思いました。(4組H)

中学生集会の話題が出てきました。八中からも参加してくれたことを本当に嬉しく思いました。せっかくですので、そのときの感想を紹介したいと思います。

■今回のこの集会には初めて参加をして、ずっと緊張していたので、発表することをためらってしまいました。。。瀬戸中学校の方の作文で、「臓器提供について考える」で思ったことと言えてないことがあったので、ここに書きます。

私の好きな歌で「ドナーリング」という歌があって、その歌詞に、「私は脳死後および心臓が停止した死後のいずれでも移植のために臓器を提供します」というのがあります。その歌を聴くたびに、道徳で学習したことを思い出ことがあります。聴くたびに、「臓器提供って、やっぱりした方が人のため？とかにもなるのかな…？」とか、思ったことが多々あります。でも、親にこんなこと言ったら反対されそうで怖くて言えないでいます。気持ちが整っていけば、相談(?)できるのかなと思いました。でも、年頃なので、親と話すのが嫌々なので、友達から話そうかなと思います。

初めての経験で知らない人ばかりだったけど、友達ができたので、次がまたあるなら、次も参加したいと思っています。

UM

来年、より多くの人が参加してくれることを期待しています！話を元に戻して、人権学習の感想です。

■みんなたくさんの意見を出してくれて、たくさん学ぶことができました。ときには先生の思いのようなことも感じることができました。障がい者だからといって特別扱いの発言をみんなしていたけれど、普段身近な人が困っていたときはどうするの？と僕は思いました。そのまま河見先生が言うてくださって、少しスッキリしました。僕はあまり関わりを持つことはないのだけれど、いつかそのときがきたときは、しっかりと役に立てるようにしたい

です。そしていろんな人から尊敬してもらいたいし、頼ってほしいです。僕はドジだけれど、ちゃんとするときにはちゃんとすると自分の中では思っているの、そのところはしっかりとしたいです。この学習をして、今まで思っていたこととは違う意見を聞くことができて楽しかったです。

ID

人はどうして働くのか？お金のため？生活のため？人によって価値観は違いますから、それはそれでいいのですが、「人の役に立っている」と実感できることも、働くことの意味ではないかと思います。でも、そもそも人の役に立っているかどうかで、どうすれば分かるのでしょうか？働けば、その対価が支払われますから分かりやすいのですが、対価だけが人の役に立った証でしょうか？みなさんが、「人の役に立った」と感じたときは、どういうときですか？

■今回は前回よりもたくさんの人が発表していて、とても楽しかったです。その中でも、ヘレンケラーの「障害は不便であるが、不幸ではない」と、橋本先生が言っていた「障害は不幸ではないが、不便である」について言っていた人が多いように感じました。私もこの言葉を聞いたときは、なるほどと思いました。その不便をなくすために、私たち周りの人や、道具などでサポートしていくことが大切だと思いました。

また、自分がしたいこととして、困っている人を見かけたら、「誰かがやってくれるではなく、自分から声をかけるようにしたい」と言っていた人がいました。私もそう思うので、自分から声をかけるようにしたいです。前回は恥ずかしくて勇気が出ず意見を言えなかったのですが、今回は言うことができました。勇気を出してよかったと思いました。またこういう機会の時は、今回のように意見を言いたいと思いました。

KH

先日、この人権だよりやみなさんの作文が徳島新聞紙上に載りました。ありがたいことです。戦争についての高齢者の投稿に混じって若者の声があるということとは、すごく意味のあることです。

「人は社会性の動物」と言われることがあります。人は人間社会で、人との強い関係性のなかで生きているということです。その点において、自分や自分たちが、「周囲の人(友達や大人)」にどう思われているか、どう見られているか、認められているか、ということは大きな関心事です。けどそれは、それだけにとどまりません。その外側にいる「世の中」が、自分や自分たちのことをどう見ているのか、認められているのかということも気になったりします。気にする必要はないかもしれませんが、気になってしまうものです。

けど気になるのなら、いっそのことプラスに受けとめたいものです。「監視されている」というようなマイナスに受けとめてしまうのは、不自由な気分になりますが、それをプラスに受けとめられれば、自分や自分たちが、通っている学校やこの町が誇らしく思えて

くるものです。

先日は新聞に、バスケットボール部の県新人戦男女W優勝の記事が出ました。その前には、NHKテレビでサッカー部が登場しました。多くの人が「八中のプラス」を知ってくれると、どこか誇らしい気持ちになります。そしてそれが、「私たちすごい!」と、プラスのイメージとして、胸張れる過ごし方につながっていくのではないかと思います。

でも、「周囲の人」に認められる、「世の中」に認められる、ともに大事ですが、行き着く先は、「自分」が自分を認められるかどうかです。行き着くところはそこです。謙虚さは大切ですが、「自分はダメな人間」とは思わないことです。みなさんには良いところがいっぱいあるし、いろんな可能性があります。あとは信じて、信じ抜いて、努力する道を自分で選ぶことです。誰かの指示を待つのではなく、自らの意思で努力をします。努力することを楽しんでしまうのです。努力できた自分に誇りをもつのです。そんな自分になっていくことです。

「今回初めて発表できた」という人は、他にもいるかもしれません。毎回、そういうフレッシュさんが出てくることで、学年の雰囲気はより良くなっていきます。「言いたい」「言おう」と思っている人は、ぜひ今度、挑戦してください。シジマチ(指示待ち)人間ではなく、イシモチ(意思持ち)人間になっていくことです。

■世の中にはいろんな障害があります。いろんな障害をもっている人がいます。発達障害、パニック障害、性障害、そして今回学習してきた視覚障害。どんな障害を持っている人でも、持っていない人でも、何か悩みを抱えていると思います。そんな悩みに寄り添って、その人のことを分かってあげたいです。でも口だけで言うのは簡単です。自分の意見を言うのはとても自分にとっては怖いことだし、人に声をかける手を差しのべてあげるのも自分には難しいことです。でも、自分の行動が少しでも誰かのためになるのなら、次からは困っている人を見かけたら、勇気を出して、声をかけてみるようにします。障害者問題を通して、たくさん人権について学ぶことができて良かったなと思いました。 SO

「悩み」も人それぞれです。困ったときはお互い様。互いの「悩み(違い)」を分かち合うことです。相手のためにも、自分のためにも。困っている人を見かけたら助ける。これ、当たり前のことですから。

ちなみに、「障がい」「障害」「障碍」と、いろんな表記があり、それぞれに使う人なりの意味合いがあるようです。ですが、当事者はどう思っているでしょう。「私たちのことを、私たち抜きに決めないで」

障害者権利条約で当事者が訴えた言葉です。みなさんにはみなさんなりの思いはあるでしょうが、当事者抜きに「決めつけ」することはできません。大切なことは、当事者がどう思っているか、ではないでしょうか。

■私はNGさんの意見にとっても共感しました。「目が見えない人を障害者と呼びたくない」と言っていました。私もそう思いました。目が見えない、他にもあります。耳が聞こえない、車いすじゃないと動けない、思っていることはあるけど声が出ない(コミュ障)とか、まだまだあるのだとは思いますが、この人たちはなりたいくたな

けでもないのに障がい者と呼ばれる。それは少し違うのではないのかと私は思います。それは、自分が少し、ほんの少しだけ小さい違いをもっていて、それでまとめて障がい者と呼ばれる…悲しくないですか!?自分がその立場になって考えてみると、最初はショックを受けて、障がい者と呼ばれるのに慣れず、月日が流れていくことに生活になじんでいく…それは私はおそろしいと思いました。

母が言ってました。「慣れることはおそろしい」本当にその通りです、慣れてしまうといいことも、逆に悪いこともあるということです。ですから、私は障がい者を障がい者と呼ばないように、そして誰にでも話しかけられる人になれたらいいなと思っています。 YM

「なりたくてなったわけでない」というのは、マイナスに捉えてるということですね。その意識はどこからくるのでしょうか。生まれたての赤ちゃんが、初めから、障がいのある人にマイナスイメージを持ってるかということ、そうではないような気がします。

みなさんは、「ガイジ」という言葉を使ったり聞いたりしたことはありますか。「変わったことをしてる人」に向けて使われているような気がします。この言葉が全国に一斉に広まった時期がありました。ある芸能人がテレビ番組で、人をバカにする場面で使ったのです。けどこの言葉の元は、「障がい児」から来ています。ひどくありませんか? ドキッとしませんか? 怒りがこみあげてきませんか? 放送直後には猛反発が起きました。にもかかわらず、今ではフツーに使われています。「覆水盆に返らず」です。もう歯止めがききません。

差別意識は、いつの間にか私たちの中にスーッと入り込んでいきます。だから、自分が差別をしているということに気づきません。そのマイナスを埋めるために、絶えず人権学習は必要なのです。

* * *

あるとき、何かの音楽会に行ったときのこと。バイオリンやチェロ、フルートやトランペットなどの音色が合わさるオーケストラの調べを聴いていてふと思いました。楽器が違い音色も違うのに、「美しいなあ」と。そして、「ああ、これはまるで人権学習だ」と。みなさんがしている学年全体人権学習です。それぞれに個性があり、それぞれの音色は違うのですが、それがうまく合わさって美しくメロディを奏でるのです。ときにはインパクトのある強い音もあります。ときには不協和音のように感じられることもあります。それでもそれも、「個性」として、メロディのなかの大切な要素になっていたりするのです。

9日の合唱発表会に向けて、クラスそれぞれが練習に励んでいます。合唱は、人権学習の実践の場です。みなさんのいる集団の居心地があまり良くなければ、みなさんは自分を思いっきり出すことができないかもしれません。けどその集団の居心地が良ければ、思いっきり自分を表現できるのではないのでしょうか。

今年は新型コロナの影響で、いろんなことが変更になったり中止になった1年でした。それでもこうやって、合唱を通じた思い出づくりができることに、感謝の気持ちをもって、思いっきり歌い合いたいと思います。みなさんそれぞれの個性が響き合い奏でる歌声を、「生きた人権学習」を楽しみにしています。